

## 大学受験勉強で遅読術を学んだ

ㄥㄥ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

私は、中学生の頃から英語が大嫌いだった。ところが、その一方で、当時の私は西部劇に夢中で、戦後上映されたものはほとんど全てと言ってよいほど見ていたので、英語が旧敵国の言葉だからキライというわけでもなかった。

西部劇役者のジョン・ウェインはもちろん、ジョエル・マックリー、ランドルフ・スコットといった俳優の大ファンだったのだが、彼らの喋る英語だけはどうしても好きになれなかった。

彼らの勇ましさやカッコ良さに反比例するような、あの英語独特の、鼻にかかった、フニャフニャした発音が何とも耳障りだった。

当時学校で使われていたジャック・アンド・ベティーという教科書も、中学生向きにしては内容が幼稚で、まったく興味が持てなかったし、先生の説明も分かりにくくて、文法の意味がよく理解できなかった。

こういった色々な原因が重なって、私は、英語の勉強がなげやりになり、授業中の態度も不真面目だった。こうなると、加速度的にますます分からなくなっていくもので、授業中はただボケーツと時間を潰していることが多かった。

この結果、私の英語の成績は、クラスでも最下位あたりをさまよっていたのではないかと思う。3年生の最後のテストで、このままでは卒業もおぼつかないという崖っぷちに立たされた私は、答を書き込んだ小さな紙を用意して、試験に臨んだ。

試験の最中に先生が私の名前を呼んだ。「立ち上がって、膝の間を見せなさい」と先生が意外に静かな声で言った。立ち上がった私の膝のあたりから、ヒラヒラと白い紙が舞い落ちた。「拾って、ここへ持ってきなさい」

先生はそれ以上とがめなかったが、学期末にもらった通信簿の英語の欄は白紙になっていた。私は、近所のお米屋さんでハンコを借り、空欄に5を三つ押した。優秀な成績なので、両親は大いに喜んでくれた。

英語の成績はゼロだったが、幸いなことに、何とか卒業はさせてもらった。しかし、英語嫌いは高校へ行っても同じで、成績はまったく上がらず、このままでは大学受験は絶望的という状態だった。

そんな或る日、私が校庭を歩いていると、呼び止める人がいた。振り向くと、例のカンニングを見つけた中学時代の先生が、バイクに乗って懐かしそうに笑顔を見せていた。

この先生は、中学校を退職し、今では教科書会社に勤めていて、私の高校へも時々教科書や参考

書を納めに来ているということだった。

「英語の勉強はどうしてる？」と先生が尋ねるので、私は、相変わらず英語が苦手だということ、大学へ入って哲学を勉強したいと思っているのだが、英語で受験するのはどうも無理だということと言った。

先生はいろいろ考えてくれたようで、「そんな時は、他の外国語をやるって手もあるんだけどな」とポツリ言い残して立ち去った。

その言葉がずうっと私の耳に残っていて、3年の学期始めにこれからの進路を考えていた時、そうだ、フランス語かドイツ語を勉強しようと思立ったのだ。私は、町の本屋で偶然目に止まった、徳尾俊彦著『フランス語四週間』という本を買ってきて、フランス語の独習を始めた。

これが幸いしたのだ。人生では何が幸運になるか分からない。私は、フランス語で大学受験に成功し、そのあとは、フランス語に関するかぎり、学友たちを常に一步リードしてきた。そして、フランス哲学の原典を読んで、大学教授の職を手に入れた。

中学の英語の先生とはそれっきり50年以上も会っていない。「他の外国語をやるって手もある」とまるで独り言のように洩らした先生の一言が、私の人生を決定的に変えたのだ。あの先生も私の恩師のひとりに数えておこう。

『フランス語四週間』を買った店には『ドイツ語四週間』という本も置いてあったが、二冊の本をペラペラとめくってみて、私はフランス語のほうを選んだ。これも偶然だった。何となくフランス語のほうの方が面白そうに見えたのだ。

そして、いま思うと、私がドイツ語よりもフランス語を選んだことも幸いだった。というのも、私は、フランス語を勉強することによって、英語も自然に分かるようになったからである。ドイツ語は英語との類似点が少ないので、こううまくは行かなかったであろう。

中学と高校の英語の時間には、ただボケーッと過ごしていただけで、字引を使うことさえ満足にはできず、私は、正式に英語を勉強したことがないというに等しかった。大学に入ってから、イヤなものから解放されたという気分もあって、英語の授業はすべて敬遠した。

ところが、学部に進んでからは、イギリスの哲学者ヒュームについての演習などに出席して、英文のテキストを読んでいたのだから、厚顔もいいところである。大学院の終わり頃には、なんと、和文英訳のアルバイトまでした。

私は学生課に和文仏訳のアルバイトを申し込んでいたのだが、来る注文はすべて和文英訳だった。やむを得ず、辞書を頼りに英文を書きなぐったものだ。私としては、終始フランス語を書いているつもりだった。

できあがった英文をアメリカ人にチェックしてもらって事なきを得ていたのだが、その打ち合わせには英語で話をし、それでけっこう通じていたのだから驚きだ。

今にして思うと、その地盤になっていたものは、私が子供の頃、徹底して見まくった西部劇の英語や、ボケーッと聞き流していた英語の授業なのではないかと思うのである。

その地盤の上に、フランス語の文法や単語の知識が置かれたので、英語との親近性が自然に得られ、英語を書いたり、読んだり、話したりすることが可能になったのではないかと思う。

私は、英語を学んだと言うよりも、或る種の「速読術」によって、英語に慣れてしまったのではないだろうか。

わらし仙人著『30倍速読術』の中で言う「ほとんど読まずして読む」(116頁)という読み方が、これに近いものなのではないだろうか。いずれ機会があったら、この英語習得の経験をもっと細かく分析してみようと思っている。

さて、『フランス語四週間』を買ってきた私は、これを超スローで読み始めた。1ページ1ページ考えながら読み、完全に理解し、完全に暗記するまでは先へ進まなかった。こうして、四週間ではなく「四か月」かかってこの本を一度読み終えたのである。

私は、この本を読み始めて、初めて語学というものに開眼したと言ってよい。がぜん語学の勉強が面白くなった。欧米語の文法というものが初めて理解できたし、単語を覚えたり、名詞や形容詞の変化、動詞の活用を覚えるのが楽しくなった。

ついに、学校にまでこの『フランス語四週間』を持って行くようになった。英語の時間には、開いた教科書の上に、この本を広げ、いわゆる「内職」ということまでやり始めた。先生が席に近づくと、英語の教科書と重ねたまま、パツと閉じるのだ。

それでも、或る日、この内職が先生に見つかってしまった。「いいよ、いいよ」と先生は寛大に許してくれたのだが、私がたまたま学校を休んだ時、みんなに言ったそうだ。「英語もできないような奴が、フランス語なんかできるようになるもんか」と。

私は、この『フランス語四週間』を四か月かかっていったん読み終えたあと、受験までの六か月間、何度も繰り返して読み、本の内容をすべて記憶した。これは遅読と速読を交えた読み方だった。

五か月目から並行して読み始めたのが、フランス語の大学入試問題を集めた、川本茂雄・田島宏著『受験フランス語』だった。これは、模擬テストのつもりで解答を試してみただけだから、速読に近い読み方だった。

こうして、私は、東京の或る大学をフランス語で受験したのだが、やはり十か月の速成勉強では不十分なことを思い知らされた。もう一度チャレンジすることにし、浪人生活を始めたのだが、予備校には行かなかった。その代わりに、フランス領事館の会話教室に通うことにした。

受験対策としては、『フランス語四週間』と『受験フランス語』をもう一度読み直すことと、あとはできるだけ単語を覚えることが課題だった。

フランス領事館では、モージェというフランス人の書いた教科書を使っていたが、これは、一年間に十数頁しか進まなかったもので、読んだ本のうちには入らなかった。

フランス語以外の受験科目についても、私はすべて教科書一点主義で、その一冊を徹底的に読解し、記憶するという方法しか取らなかった。問題集も、前年度の全国大学入試問題をまとめた分厚

い一冊しか使わなかった。

ただ、私には一つ問題があった。理科の受験科目のうち「生物」は、私の高校では教えていなかったのだ。私が通っていたのは実業高校で、私は電気科に属していた。ここでは、物理や化学の授業はあったが、生物の授業は無かったのだ。

実は、例のカンニング事件のせいかどうかは知らないが、中学の担任の先生は、私に高校への内申書を書くことをいっさい拒否したのだ。学区制による普通高校も、それ以外の私立高校もすべて駄目だった。

そこで、内申書や推薦書なしで受験できる公立高校を自分で探すことになり、私が見つけてきたのがこの実業高校だった。私は、この高校へ進んだことを今でもまったく後悔していない。当時は、高校野球の名門校だったし、大学野球やプロ野球で活躍し、大監督になった先輩もいる。

先生方も個性的な人が多かった。卒業後も親交が続いている先生も何人かはいる。ただ、私の「電気」の成績は最悪で、クラスのビリから数えていつも2番目だった。不思議といつも最下位が一人いたのだが、あれは誰だったのだろうと、今でも思うことがある。

それとともに、「生物」の時間がないということが私には何とも残念だった。私は、子供の頃から、動物や昆虫が好きで、その生態には大いに興味を持っていたのである。

そこで、生物の勉強も独習でやり始めた。そして、どうせなら、物理とともに生物も大学受験の科目にしようと思いついたのである。

物理も、大学受験を目指した時から本格的にやり始めたので、ほとんど独習に近かったが、これは教科書を復習することでやっていたらと思つた。

問題は生物の学習書だったが、私は、本屋で慎重に選んだ沼野井春雄著『生物の研究』という本を買ってきて、この一冊に賭けることにした。

やはり1ページずつゆっくり読んでいく「遅読」の方法で、細かくノートを取り、勉強し終わったページは破り捨てていった。図や挿絵は切り抜いてノートに貼り付けるのだ。

読んだページを破り捨てるという悪い癖は、すでに小学校の頃からあって、当時私が読んだ何冊かの本には、この痕跡が残っている。

その中で最も悔やまれるのは、手塚治虫が初めて出したマンガ本『新宝島』で、別にメモを取ったり写したりしたわけでもないのに、最初の数ページを破り捨ててしまったことだ。いま完全な本が残っていたら、一千万円はするということに。

私は、一年浪人生活を送ったあと、同じ大学を再びフランス語で受験した。今度は大成功だった。合格発表後しばらくして、大学から電報が来て、学校へすぐに来ようという連絡を受けた。

何かとんでもない問題が起こったのではないかと不安になり、大学へ着くまでは実にイヤな気持ちだった。指定された部屋を恐る恐る訪ねたのだが、用件を聞かされて驚いた。試験成績がトップだったのだ。入学式の時、私が学生総代として答辞を読むことになっていた。

私のフランス語の間違いは二つだけだった。不要な綴り字記号を一つ付けてしまったことと、辞書という言葉が女性名詞あつかいしてしまったことだ。

だが、私自身驚いたのは、生物の試験結果である。試験の前日、私は遺伝に関する本を一冊買ってきて、それほど厚い本ではなかったのに、眠る前までに読んでしまおうと思った。要するに、「速読」を試みたのである。

読書の途中で眠くなり、本は半分ぐらいしか読めなかった。ところが、その最後の部分が試験に出たのである。

ほとんどモウロウとした意識の状態、ただ読み終わることだけを急いでいた。完全な斜め読みであった。最後は本を手から滑り落として、眠り込んでしまったのだが、その最後のページで読んだ、ヒトからアオミドロに至る染色体の数を、私は完全に記憶していたのである。

試験問題は、その染色体の数を全部書かせるものだった。まさに、奇蹟に近いようなこの速読と完全記憶のおかげで、私は、最も心配だった「生物」でも、満点か、あるいはそれに近い答案を提出することができたのである。

これは、先ほども挙げた、わらし仙人著『30倍速読術』が教える「速読」に近いような読み方だったのではないだろうか。

しかし、このような「速読」によって成功を収めたのはこの時だけで、その後の私は、むしろ「遅読」によって哲学を学んできた。

そして、その遅読の方法は、大学受験勉強の頃から知らず知らずのうちに身につけ、習慣化してきたものではないかと思うのである。

なぜなら、受験勉強というものは本質的に遅読・少読によって成り立っているからである。

大学受験ばかりでなく、国家公務員試験にせよ、司法試験にせよ、少数の本を徹底的に読解し、記憶すれば、成功する可能性は大である。

外交官試験に合格した私の知人は、憲法、民法、経済学、国際公法、国際私法、外交史を1冊ずつ読んだだけで、論文試験を優秀な成績でパスした。

彼は、一般教養のためには問題集と二、三の雑誌も読んでいたが、これはおそらく、速読・多読による方法を用いていたのであろう。受験勉強の種類によっては、速読・多読とその繰り返しが有効な場合もありうる。

このようなわけで、職業や身分を手に入れるための受験勉強で、学習対象が限定されているものに対しては、遅読・少読を主たる読書術とし、その補助手段として速読・多読を用いるのが望ましいのではないかと思う。

一方、速読・多読を主たる方法とするのは、或る職業や身分を手に入れた後、広い視野と大きな目標をもって、自分の仕事に専念しようとする時である。しかし、この場合も、職業によって重要

度は異なるが、遅読・少読による読書術も必要になるであろう。

[2006/12/12 magmag]